

「武蔵野新田開発と所沢市域の開発」講座

2020-02-25 記 小倉洋一

■実施日：2020-02-20(木) ■参加者：32名 ■中央公民館：学習室 8, 9号

■講師：木村立彦氏

例年この時期は、江戸期の歴史講座を木村立彦氏にお願いして学んでいる。これまで、「武蔵野話」、「江戸期の所沢市域の領主と支配」、「武州世直し一揆」、「幕末期の所沢商人」、「新編武蔵風土記稿」、と所沢市域の歴史を学んできた。

今回は、享保7年(1722年)から始まる武蔵野新田開発についての講座である。市域北部は江戸時代の中期まで原野が広がっていて、その原野を家畜の飼料や畑の肥料、あるいは燃料を入手するための「秣場」として利用していた。幕府は財政を再建する目的で、原野を開発して農地とする方針を打ち出した。開発にあたっての困難な作業があったが、それらを木村立彦氏に講師をお願いして学んだ。



所沢の地域特性ともいえる武蔵野の風景をつくりだした歴史的な事象に、江戸時代の新田開発がある。なかでも、8代将軍吉宗が実施したいわゆる享保の「武蔵野新田開発」は、特筆すべき出来事といえる。現在の神米金、北岩岡、北中、東狭山ヶ丘の一部は、この時の開発によってできた地域であり、今もその面影を残している。

新田といっても畑作新田である。今日の新田というと水田を思うが、当時は田畑の別にかかわらず開墾地を広く新田と呼んでいた。今回は武蔵野新田開発について、以下のレジュメに沿って歴史的意義について説明があった。



1. 所沢における開発の痕跡

・地名

神米金・・・神谷新田、久米新田、堀兼(金)新田

北岩岡・・・北田新田、岩岡新田

北中・・・北野新田、中北野新田

・その他

引寺・・・宝泉寺(北岩岡)

石造物・・・路傍の石仏(供養塔や地蔵など)

※参考、昭和 27 年(1952 年)所沢市全図に地名が掲載されている。

2. どのような開発だったのか

キーワードによる開発の特徴

- ・目安箱
- ・江戸町奉行(関東地片御用)
- ・武蔵野(原野=秣場)
- ・分割(武蔵野の分割、所沢原の分割、北武蔵野と南武蔵野)
- ・村請(合村、個人請)
- ・出百姓(入植者)
- ・家作料、農具料の支給、肥料の貸付
- ・養料金貸付制度

武蔵野の新田開発は、幕府が開発する方向を打ち出したことにはじまり。江戸町奉行大岡越前守忠相配下の代官岩手藤左衛門は所沢市域へも巡回に訪れ、周辺秣場を開発することを命じた。

3. 困難をどう克服していったのか

- ・江戸町奉行大岡越前守による人材登用
- ・担当代官による開発推進

開発が一向にすすまないなか、享保 17 年(1732 年)に担当代官が上坂安左工門に変わった。上坂は同年、開発の有無にかかわらず、原野を 3 つに分け、重い年貢を課して、開発すれば年貢を減額する措置をとり、幕府の財政再建の一環として実施された享保の開発は何としても進めなければならなかったのである。

この措置により開発が徐々に動き出した。しかし重い年貢を課したため土地を開墾途中で手放す人たちも数多くいた。また、村で請け負うことができないとして、個人へ譲ることもあった。岩岡新田は町谷村の岩岡氏、北野新田は所沢村の北田氏、神谷新田は吉見町の神谷氏がそれぞれ開墾を進めたものである。

一方幕府は新田に農民が定着するよう入植者には、様々な便宜を図った。しかし当時の幕府財政では農民の要求に十分に應えることが出来なかった。そこで幕府は農民の気心や農業経営を理解している、多摩郡押立村の名主である川崎平右衛門を代官に登用して打開策を図った。

4. 新田開発が遺したもの

- ・雑木林の風景
- ・特産物(サツマイモ、狭山茶など)

当時何を栽培していたのか。「村明細帳」から拾うと、大麦・小麦・粟・稗・大根・蕎麦などが一般的であった。武蔵野の新田では雑穀や野菜が食料ともなり、また貨幣を獲得する手段でもあった。所沢市域の石高は新田開発前が(1644年～48年)約6,400石、幕末期(1868年頃)約12,300石になった、これは幕府等の新田開発によるものが大きい。

最後に享保の新田開発が、それまでの江戸時代前期の開発や三富新田開発と大きく異なる点は、新田村の成立まで40年近くの長い期間を要したことである。これは武蔵野新田の開発がいかに大変だったかがわかる。

木村立彦先生の講義は江戸時代の所沢市域にスポットをあてたもので、所沢の歴史を学ぶ我々サークルとしては今後も継続して学習していきたいものである。